

戯曲

「行先不明の小鳥たち」

作 ササキタツオ

《登場人物》

少年

少女

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

■ 行先不明の小鳥たち

薄闇を切り裂くように、

頭上を大型の飛行機が通過する。

轟音。

少年がいる。

少年「飛行機が頭上すれすれを通り過ぎて行く……（切迫した感じで）あの頃、僕は太陽と月と星たちに監視された、小さな世界に閉じ込められて生きていた。僕が彼女と出会ったのは、太陽たちの監視の目から逃れた秘密の屋上だった。そこで僕らは出会い、そして、別れた」

少女が見える。

少年、手を伸ばす。

だが、少女には届かない。

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少年「あの頃の僕ら二人は居場所を失くした小鳥だった。一羽は世界の外側へと飛び立ち、もう一羽はこの世界に留まることを選んだ。ここは、死の国みたい、と彼女は言った」

再び、飛行機が頭上を通過する。轟音。

少年と少女、空を見上げる。

■ 空を飛ぶ

けたたましく鳴くセミの声……。

少年の影……。

少年「世界から隔絶された屋上だけが僕たちの防空壕だった。色々な攻撃から逃れるための、僕たちの、居場所だった」

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少女と少年、並んで……。

少女「珍しい」

少年「そう？」

少女「君が屋上から何かを見ている時は決ま
って、珍しい」

少年「そうかな？」

少女「高いトコ、好き？」

少年「気持ち悪いだけだよ……」

少女「怖くなった？」

少年「まさか」

少女「じゃあ、ここからもう一回下見てみて」

少年「イヤだよ」

少女「いいから」

屋上の端に行き、見下ろす少年。

少年「うわっ……」

少女の隣に戻ってくる少年。

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少女「怖くなった？」

少年「全然」

少女「人がゴミ屑みたいに見えるでしょ？
あれが私たちの普段いる世界だなんて、な
んか、すごい違和感だって、そう思わな
い？」

少年「……そんな風には感じないけど」

少女「へえ、貧しいんだね、想像力」

少年「想像力？」

少女「鳥のように、自由に空も飛べる、想像
力だよ」

少年「想像力なんて、ない方が余計な心配し
なくていいよ。無駄に考える事もないし」

少女「なら、君とは、ここでお別れだね」

一歩前に踏み出す少女。

少年「えっ……？」

少女「私は行くけど、君は……その感じじゃ

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

あ、あっちの世界には行けないね」

少年「どうしてさ！？ 僕も行くよ！ そのために。そのためにここまで来たんだ」

少女、少年を見て。

少女「(笑って)もう腰抜かしてるじゃん。無理に付き合わなくていいんだよ、君は君。私はここから飛びます」

少年「待って。僕だって！」

少女「君はペンギンだからなあ。君は、飛べない鳥だからなあ。でも、ペンギンってどうなんだろうね、飛べなく進化した鳥なのか、最初から飛べない鳥だったのか……。君も、最初から、飛ぶつもり、なかった。そうでしょ？ でも、私は違うから」

少年「待って。それは……。でも、だって、飛んだらさ……。！」

少女「どうなる？ 想像できる？」

少年「それは、もちろん……。そのまま地面に、

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

落ちて、ぐちゃぐちゃ、って、なって……」

少女「へえー、そういうとこ、実際に見たことあるわけ？」

少年「それは、ないけど……」

少女「なら、わかったようなこと言うの、やめてくれない？」

少年「だって、それくらい、想像すれば……」

少女「（冷笑し）へえー。君にもあったんだ、想像力」

少年「誰でも、ちよつと考えれば、それくらい、わかることだよ」

少女「そうかな？ 本当にそうなのかな？（と少し考えて）じゃあ、なんで。誰も私

のこと、守ってくれないの？」

少年「それは……」

少女「生と死の断絶。その距離を永遠っていうんだよ」

少年「え？」

少女「私、行くから」

少年「待って！ 君は、その、どうなるか、

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

わかっていないわけじゃないんだろ？」
少女「もちろん。わかってる。誰よりもよく
わかってる。私は、鳥よりも自由に空を飛
べるんだってこと！」

少女は屋上から飛び降りた。
ガラスが割れる。
そして、真っ赤に染まる世界。

■ 鳥になった彼女

薄闇を切り裂く轟音。
頭上を通過する飛行機。轟音。

少年だけがそこにいる。

少年「銀色の翼を大きく広げて、彼女は永遠
の空へと羽ばたいた。僕は、急いで彼女の
後を追いかけてしようとしたけどダメだった。
血の波にのまれて気を失っていた。気が付

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

いた時には、すでに彼女は遠く、世界の果てに消え去ってしまった後だった。血だまりだったその場所はきれいに清掃されて、何事もなかったかようになっていた。流れてしまった星のように、彼女はもうこの世界のどこにも存在しない光になってしまったんだ。あの日、あの時、あの屋上で。彼女は本当の鳥になった。それなのに、僕は、僕はまだ、この世界の重力に引かれ続ける重たい石のような体に縛られて、太陽の光の槍に貫かれ、海の底に沈んでいる。もう二度と取り戻せない時があることを知った時の重さにすり潰されて、絞り出されてきた涙は、照りつける太陽に焼かれる。アイツらにとって、彼女は、はじめから人間ではなかったのだ……」

■
いじめの代償

燃えるような血だまりの中、

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少女だけがそこにいる。

少女「私は弾けてなくなった。なんという快樂、喜びだろう。私は、人を殺しました。何人も。何人も殺したんです。でも、罪に問われることはありません。だって、心中で殺しただけだから。でも、アイツらは私を本当に殺しました。殺したんです。私の心を殺したんです。だから、私は、最後にアイツらに復讐することに決めました。私はずっと待っていました。待っていたのです。アイツらが、屋上で待つ、私の下を通りかかるのを。そのタイミングを。ずっと、待っていたのです。待っていた時がとうとうやって来ました。私にはすぐにわかりました。アイツらの人を刺すような、嫌いな笑い声。どんなに人混みに紛れていようと、この心の傷が、アイツらをかぎ分けるのです。私は初めて神に感謝しました。待ちに待った時が来たのです。私はこのため

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

に今日まで生きてきたのです。そう思いま
した。そして、私は体から、爆弾の安全ピ
ンを抜きました。その瞬間、全身に電流が
走りました。痺れたみたいに心は震え、胸
の鼓動はこの肉を突き破って飛び散りそ
うな勢いです。ずっと我慢してきた衝動、
独りで耐え続けてきた痛みが、私を突き動
かしていました。もう我慢することは出来
ません。これまでも、私は何度となく叫ん
できました。だけど、その叫びは結局どこ
にも、誰にも、届くことはなかったのです。
誰にも私の心はわからない。一度入ったス
イツチはもう止められない……。あとは簡
単でした。アイツらに目がけて、私は思い
切り飛びました。鳥になって飛びかかりま
した。そして、見事、命中。皆さん、私の
大好きな皆さん、こんにちは！ って。そ
して、大嫌いな皆さん、さようなら。って。
これが私の、最後の記憶です」

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

打ち寄せる波。

海が広がるような感触。

■ そつと……

少女が座っている。

少年がやってくる。

少年「太陽と月と星とが監視している牢獄で、僕たち二人は闇に隠れて何度も抱き合った。お互いに存在していることを確かめたかったんだと思う。そうしないでは、僕らは生きていられなかった……」

少女の隣に、少年が座る。

少女、少年に手を差し出す。

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少女「手握って」

少年、少女の手を握る。

少年「こう？」

少女「もっと、ぎゅっと」

少年、少女の手をしっかりと握る。

少年「痛くない？」

少女「あたたためて」

少年、両手で少女の手を握る。

少年「これでいい？」

少女「ねえ。ここじゃない、どこかへ行つて
みたいって、思ったことない？」

少年「どこかへ行きたいの？」

少女「私、南に行きたいな。ずっと、ずっと
遠くの、南の、暖かなところがいい」

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少年「九州とか、沖縄とか？」

少女「もっと遠く」

少年「なら、石垣島とか？」

少女「石垣島よりも、もっと先がいい。地図帳にも載ってない、誰もいない、静かなところに行きたいな」

少年「そうしたら、あとは無人島になっちゃうよ……」

少女「そこで静かに暮らすの」

少年「それも、いいかもね……」

少女「ねえ、外が気になる？」

少年「そんなことないよ」

少女「でも、さつきから、どこ見てるの？」

少年「考えてたんだ」

少女「何を？」

少年「二人で、この世界から逃げる計画」

少女「それなら、まず、ちゃんと私の事を見て。考えるのは、それからにして」

少年「君の瞳は、いつもどこかずっと遠くを見ているような気がする……。（ため息を

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

つき) なんで、アイツらは君に辛く当たる
んだろう……」

少女「やめて！ アイツらをこの場所に入れ
ないで！」

少年「ごめん……」

少女「ここは、私たち二人だけの楽園なんだ
から……！！」

波の音が聞こえてくる。

少女「なんか寒い。ねえ、ちゃんと握って」

少年「でも、これ以上強くしたら、痛いよ」

少女「(小さく笑って) 君なら、いい」

少年「痛くなっても、知らないよ」

少女「絶対離さないで！」

波の音が強くなる。

少女「(ぼんやりと) ねえ、私、本当に、ここ
にいるのかな？」

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少女、少年の手をゆっくりほどいて、
去る……。

少年「彼女はもうここにはいない。今になつて思う。彼女は、きっと南へ飛んで行ったに違いない。ここより自由な場所。彼女だけの楽園がそこにはある。彼女は色々なしがらみから、解放されたのだ。自由に想像力の中で飛んでいるんだ！」

大きな波が打ち寄せる……。

■ 残された小鳥

少年だけがいる、青い世界。

少年「僕は、一体、彼女にとって何だったの
だろうか。彼女をこの世界につなぎ留めて
おくのに僕では不十分だったのだろう

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

か。もう息なんて吸いたくないのに、この胡散臭い悪意に満ちた世界の空気を吸わずにはいられない。僕は弱い。どんなに心を殺しても、針金細工のようによじれながら生きろと訴えかけてくるこの体が憎い。そこまでして僕は生きていきたいのか？ 冗談じゃない。僕は飛びたい。飛べない鳥だと言われても、ペンギンだって言われても、僕は飛びたい。そして、彼女のところへ行きたい。海の底で惨めにもがく。口から泡を吐く。爪が剥かれた。胸に突き刺さった槍が食い込む。逃れられない、アイツらの烙印が僕をこの世に縛り続ける。もはや麻痺して痛みも何も感じない。ただ時間だけが過ぎていく、まどろみの中で僕は空を見上げた」

少年「一緒に南の海に行きたかった」

少年「二人で一緒に未来を描いたはずだった。」

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

それなのに。どうして、彼女だけ飛んでしまったのだろうか。あの日の、屋上の青空は、今まで見たどの空よりも白かった。どうして彼女は飛んだのだろうか。何度考えても、僕にはその理由がわからない。ただ、一つだけ言えるのは、僕が、彼女の事を何一つ理解してはいなかったということだ。そうして、いつの間にか、僕は、もうこれ以上先へは進めないというへドロの海に溺れていた」

飛行機の轟音と共に、暗闇に落ちる。

■ 見えないあなた

少女と少年、彷徨っている……。

絶対的に交わらない、二人の世界。

少年「姿が見えない」

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少女「ここにいるよ」

少年「真っ暗闇の通せんぼを前にして、彼女の声が聞こえた気がした。どこなんだ？どこにいるんだ！？」

少女「ここにいるじゃない」

少年「ここって、どこ？」

少女「あなたのとおり」

少年「となりって？」

少女「右、向いてみて」

少年「いないじゃないか」

少女「それは左よ」

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少年「右向いたよ」

少女「残念、左にいた」

少年「どっちなんだよ」

少女「（微かに笑う）」

声だけが交錯する。

少年「ずっと、そこにいたの？ この暗闇の

中、僕を待って？ ずっとそこに一人でい

たの？」

少女「だったら？」

少年「僕は、ずっと待ってた」

少女「ずっと待ってたの？ 誰を？」

少年「君をだよ」

少女「なんか、違う気がするな」

少年「本当だよ」

少女「ホントウ？」

少年「絶対に」

少女「絶対なんてコト、この世の中にあるの

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

かしら。私はそんな言葉、信じない」

少年「君は、相変わらず、疑り屋さんだ」

少女「(ポツリと)……やっぱり、君は違う」

少年「何が？」

少女「違うの」

少年「どうしたんだよ？」

少女「私の君は、そんなこと言わない人だった。私を信じてくれた。あなたは誰？ あなたは一体誰なの？」

少年「僕だよ。君を、ずっと待ってたんだ」

少女「そうじゃない。君は最初から誰も待ってなんかいない。私が知っていた君はもうここにはいない。君が求める私も、もうここにはいない。二人の世界はとっくの昔に消えてなくなってしまったんだから」

少年「なら、なんで今になって、君は僕の前に現れたんだ？」

少女「想像力かな」

少年「僕にもあったのかな？」

少女「あったよ。一緒に夢を見たじゃない」

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

少年「でも……僕だけ……生き残って……」

少女「君は飛べないペンギンだからね」

少女の方を見る少年。

少年「僕は君を助けたかったんだ！」

沈黙。

少女の世界と、少年の世界が一瞬だけ、
交錯して、視線が交わり、そして、途
切れる……。

少女、去る。

少年「彼女は何も答えず、僕の前から消えた」

よたよたと少年。

頭上を飛行機が通過する。轟音。

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

それを見上げる少年。

少年「彼女と一緒に飛びたかった空は、どの空だろう。白と黒とが交差して、次第に闇が大きくなる。この手の中につかまえたと思じた、あの、青い鳥はもうここには戻らない。残ったのは、色あせた心のアルバムが一冊だけ。でも、その中の写真は全部焼いてしまった。僕には思い出なんか必要ないから。そして、僕は、まだ、一人ぼっちという名の部屋で、流した血の海の中に沈んでいた。あと何時間、ここで、こうして、待っていればいいのだろう……。誰も来ない。僕は誰にも見つからない。静かな眠りだけが、僕を迎えに来てくれる」

■ 遠くへ。

少年だけが残された世界。
耳をすます。

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

聞こえてくる波の音。

イメージの中の海。

少年「水平線の向こう側に飛んで見えるのは、海鳥だろうか。あの先で、きっと彼女は待っている。あそこだ！ あそこに向かって飛んでいけばいいんだ。僕はようやく全てを理解した。急に体が軽くなる。全身に力が湧いてくる。腕も軽く、重力から解き放れたようだ。胸に刺さった槍を引き抜く。まるで鳥になったみたいだ。これが自由？ 僕も、ついに、自由を手に入れたんだ。飛べる。今度こそ、飛べる！ 何度も何度もこの手の感触を確かめてみた。間違いない。行ける。準備は出来た」

現実に引き戻される少年。

少年「だけど、その時、僕は気が付いてしまった。道もなく、当てもない。果てしなく、

戯曲「行先不明の小鳥たち」
作 ササキタツオ

何も見えない。この場所から、彼女のいるところまで。一体何を頼りにして、向かって行けばいいのだろう。生と死の断絶。その距離を、永遠と呼んだ、彼女のところまで、僕はどうやって飛んでいけばいいのだろうか？ こんな風にして今日も世界は終わるなんて。虚しい人たちが行きかう世界を見下ろした、屋上で、独り見上げた空は、あの日よりも白く輝いていた……」

まばゆい光が、少年を包み込む中、
鳥が羽ばたく……。

(終)